

皆さん、コロナウィルスの格子無き牢獄の中、如何がお過ごしですか、お元気ですか？ 今日、中唐の賈島の「桑乾を渡る」という詩を紹介し、二十年ほど前北京を訪れた時のお話し度とおもいます。

度 桑 乾（桑乾を渡る） 中唐 賈 島

客舎并州已十霜 并洲に客舎して已に十霜

帰心日夜憶咸陽 帰心日夜咸陽を憶う

無端更渡桑乾水 端無くも更に渡る桑乾の水

卻望并州是故郷 卻つて并州を望めば是故郷

并州に身を寄せて、已に十年が過ぎてしまった。

その間、日夜都の長安を思い続けてきた。

ところが今、なんと桑乾の流れを更に渡つてもつと

辺地に赴任することとなつてしまった。

ふり帰つて并州を望むと、仮の宿と思ひ厭だと思つ

ていた并州が故郷のように懐かしく思えてきた。

賈島は中唐（七七九年〜八四三年）字は浪仙。范陽（河北省

涿県）の人。約二十年間科挙の試験に応じ続けたが及第せず出家して、無本と号し長安の青龍寺に住んだ。都の長官韓愈に認められて還俗し、進士にも及第したが、官途にはめぐまれず、地方の小官で終わった。

賈島が韓愈に詩才を認められたという話は「推敲」の故事として有名である。ある時、賈島は驢馬に乗つて長安に向かいながら詩を考えていて、ふと体句を思い浮かべた。

烏宿池中樹 僧推月下門 ここで「推」と「敲」どちらをとるか考えるうちに、貴人の行列にぶつかつてしまった。これが都の長官韓愈で韓愈の前に引き出された賈島が、わけを話して無礼を詫びると、韓愈はしばらく考えてから口を開いた。

「それは、君、敲の方がよい。」

桑乾河は、山西省馬邑県付近を源流とし全長六十四キロメートルの川。桑の実が熟する頃に水量が少なくなるので、この名前がついた。山西北部から河北省に入り、北京と涿県との間を流れる。北京市郊外では、永定河となり、市の南を流れて運河に入り、盧溝河と呼ばれ、一九三七年日中戦争の発火点となった盧溝橋は北京市の西南約十五キロメートルの所である。

この橋が架けられたのは、金の一八九九年で、マルコポーロが「東方見聞録」の中でこの橋の美しさを称賛している。又、清の乾隆帝の筆による「盧溝曉月」の詩碑もあり、更にここから南西に四十キロ行った所にご存じ、北京原人の頭蓋骨が発見された周口店がある。

その日、私は、冷凍機の市場調査の目的で北京にいた。今と異なり

二十数年前の北京の十月は、「北京晴天」と言はれ、どこまでも青空が広がっていた。昨日は、北京市内の王府井大街（ワンプーチンターチュエ）や西単北大街（シータンペイダーチュエ）の市場、マーケットで、どの程度の冷凍食品が扱われているか、ぶらぶら見て回ったので、今日は、北京市郊外南三十キロ程の所にある北京紅航天（国营のロケット製造会社）の傘下の北京天雲汽車改装廠が冷凍車のボデーを作り、雨漏れテストをしていると聞いたので、そこへ出かける事とした。それと言うのも、市場調査を依頼していた調査機関の事務所が北京飯店の旧館にあり、親父が、昔、横浜で松下幸之助さんと一緒に経営していた会社を退職した時の退職金で、朝鮮・満州大旅行した時に、この北京飯店に泊まった事があり、テレビに北京飯店が映ると「ここに俺は、泊まったんだ。」と自慢げに話していらしたのでその足跡を尋ねて見たいと思つたのと、我々が奇しくも生まれた一九三十七年中戦争が始まる元となつた盧溝橋が見られるかもしれないと思つたからである。調査機関「の富士経済の北京事務所の 高 偉（ガアオ ウエイ）さんに電話すると、「すぐ、ホテルに迎えに行く」と言うので、「こちらから出向く」と伝え、北京飯店に向かった。

前門（チェンメン）のそばの路地まで来ると、一人の麦わら帽子をかぶつた日に焼けた老人が段ボール箱を前に置き、座っている。中を見ると、なにやらウロコのある口のとがった五十センチほどの動物がいる。「ウェイ、ターイェ、チョウシー シエンマ」「シイヤンマ」

「おじさん、これ、なに」「飼育するの」「ブー・チイヤ」「違ふよ食うんだよ」「シーマ」「えーそうなの」この時、なにげなく見てアルマジロと思つていた動物が何と今回のコロナウイルスを媒介した張本人センザンコウであつた。この時は、今のような大変な時代が、訪れる事を知る由もなかつた。北京飯店の事務所は、ホテルの時のままの部屋の佇まいだつたので、元気だつた頃の父を、ふと思ひ出した。

それからタクシーに乗り、目的地に向かった。本当は、盧溝橋を渡つて行きたいと言いたかつたが、高 偉（ガアオ ウエイ）さんの手前もあり、運転手の任せるままに行くと、運よく盧溝橋を通ることができた。盧溝橋は、素晴らしい彫刻が数あり、御多聞にもれず美しい橋であつた。橋のたもと清の乾隆帝の筆による「盧溝曉月」の石碑も見事な出来満足であつた。ほこりばい赤土の道を行くと道路の脇には、古い汚れたレンガ建ての軒が低く窓には、丈夫な格子がある家が建ち並んでいた。その先に、北京天雲汽車改廠があつた。工場長の閻 中思（エン チュンシー）さんは、小柄で日焼けした歳は五十九がらみの人柄の良い煙草の好きな人で、ここまで来た日本人は初めてだと歓迎してくれ、いま作ろうとしている冷凍車のボデーの事、雨漏れテストの方法、課題などを詳しく説明してくれた。二時間位ここで話してからこの地を後にした。西の周口店の方を見やると、夕焼け空が一杯に広がっていた。